



|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 図書寮本類聚名義抄における論語の和訓について                                                            |
| Author(s)        | 呉, 美寧                                                                             |
| Citation         | 国語国文研究, 116, 35-48                                                                |
| Issue Date       | 2000-07-31                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/94673">https://hdl.handle.net/2115/94673</a> |
| Type             | journal article                                                                   |
| File Information | kokugokokubunkenkyu_116_35-48.pdf                                                 |



# 図書寮本類聚名義抄における論語の和訓について

呉 美 寧<sup>ヨシ</sup>

## 《目次》

- 一 はじめに
- 二 図書寮本類聚名義抄の論語の和訓
- 三 図書寮本類聚名義抄の論語の和訓と平安時代の論語訓読
  - 1 平安時代の論語訓読と鎌倉時代の論語訓読
  - 2 論語本文の字と図書寮本類聚名義抄の見出し字
  - 3 高山寺本論語集解卷第八の訓と図書寮本類聚名義抄の和訓引用
- 四 まとめ

## 一 はじめに

図書寮本類聚名義抄には、以下の48字<sup>①</sup>において、論語の訓点本から和訓が引用されている。

淪没・温故・涅・排湯（以上水部）・讀誦・謀議・所詔<sup>詔</sup>・於言・

謂・譎・疾證（以上言部）・踰踞・不踐迹・距・跲（以上足部）・等比（卜部）・崖岸（山部）・磨・磷（以上石部）・玷玼・班宣（以上玉部）・郷（邑部）・了本際（阜部）・三塗・圻（以上土部）・忠・懷・詐愚・詐愚・惡作・忘・慍恨・恥辱・恥辱（以上心部）・將帥・希（以上巾部）・經緯・純淑・尋繹・委細・累・周給・縦横・婉約・綏恤・縝（以上糸部）・表裏・被服（以上衣部）

本稿は、この48字に引用されている論語の和訓について、鎌倉時代の論語の訓点本を用い、考察したものである。本研究は、次の二点において意義をもつ。

一つは、論語の訓読史における意義である。

周知のとおり、論語の訓点本は、鎌倉時代以後のものは多く残されているのに対して、平安時代のものには現存するものがない。従って、平安時代の論語訓読の実体は、知るべきがない。しかし、図書寮本類聚名義抄（以下、図書寮本）の成立は一一〇〇年頃とされるので、図書寮本所引の論語の和訓について考察することによって、

平安時代の論語訓読の一面をうかがうことができるのである。また、調査に鎌倉時代の訓点本を用いることによって、平安時代の論語訓読と鎌倉時代のそれとを比較することにもなり、論語の訓読の変遷について若干の手懸かりが得られることになるのである。

二つは、図書寮本の文献学的研究における意義である。

図書寮本には、論語だけでなく、他の訓点本からの和訓が多く引用されている。図書寮本の論語関連部分と論語の訓点本との関係を調べることは、図書寮本の出典研究及び、図書寮本所収の和訓の研究に欠かせないものである。

## 二 図書寮本類聚名義抄の論語の和訓

論語の和訓として引用されている48字は、そのすべてが論語にあらわれているわけではなく、論語で確認される場合も、論語の本文だけでなく、注文<sup>2</sup>からのものもある。さらに、図書寮本に引かれている和訓が、鎌倉時代の訓点本では見られない場合もある。

以下、48字を分類し、考察していく。

- 1 見出し字が論語にあらわれ、和訓も一致するもの：42字
  - ①本文からのもの：36字
  - ②注文からのもの：6字
- 2 見出し字は論語にあらわれるが、和訓は一致しないもの：2字
- 3 見出し字が論語にあらわれないもの：2字

4 その他：2字

### 《凡例》

一 テキストは、『図書寮本類聚名義抄』（勉誠社、一九七六）を用いた。なお、掲出場所は、（頁／行段）のよう示す。

一 考察に用いた論語の訓点本は、以下のとおりである。

・高山寺蔵論語集解卷七・八 鎌倉極初期書写加点点本 清家本  
（『高山寺古訓点資料第一（高山寺資料叢書第九冊）』東京大学出版会、一九八〇）

・醍醐寺蔵論語集解卷七 文永五年（一二六八）書写加点点本 中原家（小林芳規（197）『醍醐寺蔵論語集解卷七文永五年点訓読文』『醍醐寺文化財研究所研究紀要』<sup>2</sup>）

・東洋文庫蔵論語集解卷八 文永五年書写加点点本 中原本（石塚晴通・小助川貞次（1987）『文永本論語集解卷第八』『訓点語と訓点資料』<sup>81</sup>）

・高山寺蔵論語集解卷四・八 嘉元元年（一一三〇）中原師有書写加点点（『高山寺古訓点資料第一（高山寺資料叢書第九冊）』東京大学出版会、一九八〇）

・東洋文庫蔵論語集解十卷 正和四年（一一三五）書写本 清原教隆加点点（マイクロフィルムの焼き付け本）

・書陵部蔵論語集解十卷 嘉暦二年（一一三七）本 清原教隆加点点（マイクロフィルムの焼き付け本）

訓をあげる際には、高山寺蔵清原家本（『高濤』）、文永本（『文』）、高山寺蔵中原家本（『高中』）、正和本（『正』）、嘉暦本（『嘉』）

の順とし、必要に応じて、成實堂本論語抄<sup>(4)</sup>（成）の訓をあげる。

なお、高山寺本と文永本の現存しない巻については、特にことわらない。

訓点本に、訓が付されていないところは「×」と示し、正確に確認できないところは「？」と示す。

訓点本の訓は、特にことわらない場合は、正訓である。

片仮名は通行字体に直したところがある。その他の表記及び記号も、適宜直したところがある。

図書寮本の和訓の声点については、声点が付いていないところは「×」、影印の状態上、声点の位置が正確に分からない場合は「？」と示す。

論語本文については、吉川幸次郎氏の章分けに筆者が番号を加えた。

用例が、論語に一カ所のみあらわれる場合は、特にことわらない。

観智院本類聚名義抄は「観」、三卷本色葉字類抄は「色」のよう<sup>(5)</sup>に略記した。

## 1 見出し字が論語にあらわれ、和訓も一致するもの：42字

①本文からのもの：36字

ここは、代表的な例、五つをあげる。

淪没<sup>(020/54)</sup> ツクス（上上×）

6カ所に登場、同訓は1カ所のみ（その他、ボッス・ヲフ・ツク）  
10/4「没階趨進、翼如也」〔正〕ツクシ〔嘉〕ツク

〔観〕ツクス（声点無し）〔色〕ツクス

排湯<sup>(052/62)</sup> オス（上平）

12/22「タウ」16/11「フ」

「湯」〔観〕オス（声点無し）〔色〕同訓無し

7/20注文「盪」〔高中〕ヲシ〔正〕ヲシ〔嘉〕ヲシ

14/6「羿善射、羿盪舟」〔高濤〕ヲス〔文〕オス〔正〕ヲス〔嘉〕オス

〔盪〕〔観〕同訓無し〔色〕見出し無し

―於言<sup>(087/31)</sup> オンシ（上上上）

2カ所の中、1カ所（その他、トツ）

4/24「君子欲訥於言而敏於行」〔正〕ヲソク〔嘉〕ヲソク

〔観〕オンシ（上上×）〔色〕同訓無し

圻<sup>(232/42)</sup> ナタラカス（平平濁上<sup>去</sup>平軽）

5/10「糞土之牆、不可圻也」〔正〕<sup>7</sup> 圻〔嘉〕 圻<sup>ナタラカニシユ</sup> 圻<sup>ナタラカニシユ</sup> 〔成〕 圻<sup>ナタラカニシユ</sup>  
 〔觀〕 圻ナタラカス〔平平上平上上〕 圻コテ〔色〕 圻ナタラカニス  
 經緯 (287/42) クヒル (上上濁平)<sup>7</sup>  
 14/18「自經於溝洫而莫之知也」〔高濤〕 クヒテ〔文〕 クヒレテ〔正〕  
 クヒレ〔嘉〕 クヒレ  
 〔觀〕 クヒル〔声点無し〕〔色〕 同訓無し

この中、「湯」について見ると、現行本では、「湯」の字にオスという訓を見つけない。図書寮本には、別条に「盪滌(55/6)」があるが、「盪」に関する和訓はない。また、観智院本の和訓の状況は図書寮本にならった結果であろうか。高山寺本以外の論語の写本にはすべて「盪」と書かれていることから考えると、これは、図書寮本が参照した論語のテキストを推定する上で一つのヒントになるものであろう。ちなみに、原本系玉篇(巻十九)に引く論語も「湯」に作っている。

また、「圻」については、「圻」「圻」「圻」の異体字の関係が注目される。經典釈文に、「圻(或本作圻)」とあり、この字の揺れは古くから存したようである。建武本では、「圻<sup>ナタラカニシユ</sup>」とある。しかし、應永二十七年本論語抄、東洋文庫蔵正平版单跋本、宣賢の点を伝える永正九年本<sup>(9)</sup>には、すべて「圻」とあり、現行本においても、「圻」である。これから考えると、室町時代後期になると、「圻」の方に定着してきたものと思われる。

## ② 注文からのもの：6字

踰踰 (106/22) ウス井 (平上濁上)  
 14/15「原壤夷俟(注)夷踞也」〔高濤〕 左ウスキシシテ〔文〕 ウス  
 キシ〔正〕 ウス井〔嘉〕 ウス井  
 〔觀〕 ウス井 (平上濁上)〔色〕 同訓無し  
 玷玼 (163/23) カケタリ (?平××)  
 4カ所の中、2カ所(その他、テン)  
 11/6 注文に2カ所〔正〕 カケタル・タル〔嘉〕 カケタル・タル  
 〔觀〕 カケタリ (上平××)〔色〕 カク  
 詐愚 (247/72) イツハリオロカシテ (平平上上上上××) 論語注<sup>10</sup>  
 5/21「孔安國曰詐愚以實故曰不可及也」〔正〕 イツハリオロカニシ  
 テ〔嘉〕?  
 〔詐〕〔觀〕 イツハル (平上××)〔色〕 イツハル  
 〔愚〕〔觀〕 オロカナリ (上上××××)〔色〕 ヲロカ・ヲロカナリ  
 將帥 (284/51) イクサ (平平平)  
 6カ所の中、1カ所(その他、スイ・ヒキイル)  
 7/14 注文〔高中〕 帥<sup>ヒキイ</sup>帥<sup>ヒキイ</sup>×〔正〕 帥<sup>ヒキイ</sup>帥<sup>ヒキイ</sup>×〔嘉〕 帥<sup>ヒキイ</sup>帥<sup>ヒキイ</sup>  
 〔觀〕 帥イクサ (平平平) 帥イクサ (平平平) 帥イクサ (平平平) 帥<sup>ヒキイ</sup>  
 帥<sup>ヒキイ</sup> 〔色〕 帥イクサ  
 被服 (334/63) フスマ (平平平)  
 10/6 注文〔正〕 フスマ〔嘉〕 フスマ  
 〔觀〕 フスマ (平平×)〔色〕 フスマ

## 2 見出し字は論語にあらわれるが、和訓は一致しないもの：2字

班宣 (169/33) ツイツ (上上平濁) アマネシ (平平平平輕)

〔觀〕 ツイツ (上上平濁)・アマネシ (上平平上)〔色〕 ツイツ (アマネシは無し)

周給 (303/23) トキ (声点無し)

〔觀〕 トキ (平平)〔色〕 同訓無し

「班」は、論語本文にはあらわれず、注 (10/18) に「アカチ」という訓として一回あらわれる。「班」の字に、ツイツ、アマネシの訓は認められるが、論語に掲出場所がないことから考えると、出典記入の間違ひであると思われる。

「給」は、公治長第五の五章の本文と注文、先進第十一の二十五章の注文の3カ所に見えるが、「口給」「捷ー給」とあり、音読される。かりに、訓読されるとしても、図書寮本の訓とは一致しない。これは論語ではなく、他の出典からのものであるう。

## 3 見出し字が論語にあらわれないもの：2字

崖岸 (138/54) タカシ (平平上) ウタヘ (平平平)

〔觀〕 タカシ (平平×)・ウタヘ (平平平)〔色〕 同訓無し (岸ウツタヘ)

累 (299/63) カサヌ (上上平)

〔觀〕 カサヌ<sup>ナル</sup> (上上×)〔色〕 カサヌ

「崖」の字は、論語の本文、注、ともにあらわれない。上字「崖」に対する「ウタヘ」という訓は、原本系玉篇 (卷二十二) には「牛佳反説文高邊也」とのみあって、確認できない。一方、下字「岸」に対しては、原本系玉篇は、毛詩の例を引くが、毛伝までしか記載していない。この部分を静嘉堂文庫蔵清原宣賢加点本<sup>注11</sup>で見ると、「岸 右タカキニ」とあり、それぞれ毛伝「岸高位也」、鄭箋「岸訟也」に対応しており、図書寮本の両方の和訓を加点している。また、清原宣賢講述の毛詩抄の同箇所にも、その本文には「岸はたかいぞ……岸はうつたへぞ」とある。これから考えると、「上 タカシ ウタヘ論」とあるこの部分は、「下 タカシ ウタヘ 詩」の誤りではないかと思われる。

「累」の場合、この字に対してカサヌという訓は当然認められるが、論語にはこの字はあらわれない。これは、出典記入の誤りであろう。

## 4 その他：2字

ここにあげる2例は、少々事情が複雑なものである。

踰〔疏〕 (118/52) ウトムス (上上平平輕濁)

4/26「朋友数斯疏矣」〔正〕ウトム〔嘉〕ウトム

〔疏〕〔觀〕ウトム<sup>ムス</sup>〔色〕ウトシウ

「踳」の字は、論語本文、そして注文にはあらわれない。また、観智院本や色葉字類抄にも同訓がない。しかし、図書寮本のこの項目の記事を見ると、前半の説明は、「踳」の説明であるが、途中、挿入を示す印があり、その後の説明は「踳」のものであることが分かる。また、「踳」の字の説明の途中にも、挿入を意味するような線がある。おそらく、「踳」の字の印以後の説明は、「踳」の字の印の所に入るべきものであろう。図書寮本の編者は、最初は、「踳」と「踳」とを混同して、「踳」の説明を「踳」の字のところに書き込み、作業を進めたが、後にその誤りに気づき、修正を加えたものと考えられる。

「懷」の字は、合計9カ所の中、1カ所において、ナツカシムスという訓を確認することができる。また、もう1カ所の一部分において、オモフという訓を確認することができる。しかし、このオモフという訓は、朱子新注の注釈による訓であるので、これは論語からの引用ではない。ちなみに23頁では、オモヒは文選、オモフは毛詩の出典としている。また、イタルとヨルは確認できない。しかし24

今度は、他の角度から用例を考察してみる。多様な基準により用例を分類することによって、その和訓の性格を確かめることができるのである。

また、その字に引用されているのは論語だけなのか、あるいは、他の出典からの和訓と同時に引用されているのか、という観点から

考察することができる。図書寮本には出典順位があり、訓点本からの和訓引用の際にも同様であることが先行研究<sup>(14)</sup>によって明らかにされている。以下、用例を和訓引用状況によって分類する。

- 1 単独引用：21字〔讀誦・謀義・所訓・譌・疾證・不踐迹・距・崖岸・磷・忠・詐愚・詐愚・惡作・忘・愠恨・恥辱・恥辱・尋繹・周給・綏恤・鎮〕
  - 2 他の出典と同時引用：25字
    - ① 出典順位上、同位以上のものとの同時引用：18字〔淪没〔易・論・記〕排湯〔論・選〕謂〔詩・記・論・律〕蹲踞〔記・論〕等比〔論・書・後・無<sup>15</sup>〕磨〔論・記〕玷玦〔論・記〕鄉〔選・論〕三塗〔孝・選・論〕懷〔書・記〕詩・論・選・列・禮・集／書・記・選・列・論・禮・詩〕經緯〔詩・論・選・論・遺・詩・列・白・切〕純淑〔易・書・詩・論・遊〕委細〔論・書・記・遊〕累〔易・論〕縱橫〔易・書・記・論〕婉約〔易・論・詩・律〕表裏〔論・選・集〕被服〔論・書・記・選〕
  - ② 出典順位上、下位のものとの同時引用：3字〔路〔疏〕〔論・月・集・後・遊〕了本際〔論・切〕希〔孝・論〕〕
  - ③ 出典が記入されていないものと同時引用：4字〔溫故・班宣・圻・將帥〕
- 引用形態が異なる：2字〔渥・<sup>16</sup>於言〕

このように、引用形態が異なる2例を含めると、論語単独の引用

が23例で全体の半分近くを占める。また、下位出典との同時引用は多くなく、同位以上の出典との同時引用が多いことが分かる。

一方この他にも、見出し字が単字であるか、熟字であるか、熟字の場合、そのままの形態で論語に登場するの、などによって分類し、図書寮本の見出しにおける論語の影響というものを考えることもできる。用例の中、33字の場合、熟字として見出しになっているが、その中、7字の場合、図書寮本の見出しの形のまま論語に見える。〔溫故・<sup>17</sup>於言・不踐迹・詐愚・詐愚・恥辱・恥辱〕がその例である。〔溫故〕を除く6例は論語以外の和訓はもたない。これらは論語から採用された見出しであろう。

### 三 図書寮本類聚名義抄の論語の和訓と平安時代の論語訓読

#### 1 平安時代の論語訓読と鎌倉時代の論語訓読

48の用例の中、その字が論語で確認できない2字と、その訓が論語で確認されない2字を除外した44字について、図書寮本に引用された和訓と鎌倉時代の訓点本の訓とを比較し、その引用が訓点に忠実なものであるかどうかを調べると同時に、平安時代の論語訓読と鎌倉時代の論語訓読の間に変化はなかったのかについて調べる。

対象の44字の中、29字の和訓は、訓点を原形に改めて記入している<sup>(18)</sup>ことが分かる。この場合、その形は原形に変えられたものの、自立語の語彙は鎌倉時代の訓点本の訓と一致している。その他の15字の



和訓は、訓点のまま記入されているが、その中の7字の和訓は、訓点が、原形の形をしている。「排湯・謀議・疾證・了本際・許愚・希・被服」がその例である。これらの字に引用された和訓もやはり、鎌倉時代の訓点本の訓と一致している。残る8字の和訓は、訓点が原形の形ではないものである。その例を、正和本の訓と観智院本の訓とともにあげる。声点は省略する。

| 図書寮本の和訓 |         | 観智院本の和訓    |         | 正和本の訓   |  |
|---------|---------|------------|---------|---------|--|
| 涅       | クリニソムレト | クリ・クリニスレトモ | クリニスレ   | (17/17) |  |
| 所認      | カタムス    | カタムス       | カタウ     | (12/3)  |  |
| 謂       | ノタウハク   | ノタウハク      | ノタウハク   | (3/1)   |  |
| 諷       | イツハテ    | イツハル       | イツハ     | (4/16)  |  |
| 不踐迹     | シタカハス   | シタカフ       | シタカハ    | (11/20) |  |
| 路(疏)    | ウトムス    | ウトシムス      | ウトム     | (4/26)  |  |
| 許愚      | オロカシテ   | オロカナリ      | オロカニシテ  | (5/21)  |  |
| 悪作      | ニクミス    | ニクシ・ニクム    | ニクミ     | (4/5)   |  |
|         | ニクミスルヲモ | ・ニクミス      | ニクミスルヲモ | (15/28) |  |

「涅」の訓以外は、図書寮本の和訓と鎌倉時代の訓点本の訓とが一致している。「涅」は、應永二十七年本論語抄に、「涅ニ染レトモクロマス」とあり、図書寮本の和訓と同形が見える。なお、観智院本においては、鎌倉時代の訓点本の訓の形になっているところが注目される。

このように、本稿の考察をとおして見た限りでは、すべての用例

が訓点のまま引用されてはいないものの、図書寮本に引用された平安時代の論語の訓読と鎌倉時代のそれとは、大きな変化はなかったことが分かる。また、観智院本においては、原形に改められたものが多くなっている。これは、図書寮本に比べ、観智院本の方が、一般辞書的な性格が強まってきたことを意味するものであろう。

次に、図書寮本の論語の和訓と中国側注釈書との関係を考えてみたい。平安朝の論語の注釈書として用いられたのは、主に論語集解、論語義疏、そして經典釈文の論語音義である。この中、同じ辞書としての性格、そして、他の書の引用文中に見られる「出内(74/63)……・中云論語云出内經典釈文云尺遂反又如字内又如字……」のような記事から、図書寮本の論語の和訓と經典釈文との関連に注目し、調べてみた。その結果、44字の中、經典釈文に載っているのは22字だけであり、その中、10字は音注あるいは反切だけを示している。その他の12字は義注ではあるが、これらの箇所については、集解や義疏も同意であって、意味の相違を見せないため、經典釈文との特別な関わりを確認することはできない。

## 2 論語本文の字と図書寮本類聚名義抄の見出し字

図書寮本の見出し字が、論語の本文<sup>(21)</sup>の字とどれくらい重なるのかを調べ、図書寮本における論語の位置を考える一つの手がかりにしたいと思う。

図書寮本の見出し字を、各部首別に数えると、以下のとおりである。

水部 399 ㄱ部 29 言部 20 足部 139 立部 44 豆部 14 ト部 18 石部 94  
 玉部 101 邑部 56 阜部 83 土部 157 心部 300 巾部 48 糸部 226 衣部 17 〈合計〉 2355

まず、論語本文を対象に、各部首別に出現字を数え、その中、図書寮本類聚名義抄の見出し字と重なる字の数を示す。そして、(一)の中には、重なる字の中、論語からの和訓の引用が見えるものとそうでないものを示した。

論語本文の字 〓 図書寮本の見出しと重なる字 (論語からの和訓引用有り+無し) + 重ならない字

水部 50 〓 44 (4 + 40) + 6 ㄱ部 5 〓 5 (0 + 5) + 0 言部 46 〓 45 (8 + 37) + 1  
 足部 10 〓 8 (4 + 4) + 2 立部 7 〓 7 (0 + 7) + 0 豆部 2 〓 1 (0 + 1) + 1  
 ト部 6 〓 4 (0 + 4) + 2 山部 4 〓 4 (1 + 3) + 0 石部 6 〓 5 (2 + 3) + 1  
 玉部 8 〓 7 (2 + 5) + 1 邑部 9 〓 8 (1 + 7) + 1 阜部 17 〓 16 (1 + 15) + 1  
 土部 25 〓 19 (2 + 17) + 2 心部 65 〓 60 (7 + 53) + 5 巾部 11 〓 9 (2 + 7) + 2  
 糸部 37 〓 33 (10 + 23) + 4 衣部 17 〓 14 (2 + 12) + 3 〈合計〉 355 〓 290 (46 + 24) + 35

このように、論語本文の出現字 325 の中、約 90% に該当する 290 字が、図書寮本の見出し字となっている。論語の本文にはあらわれるが、図書寮本の見出し字にはなっていない 35 字も、現存の図書寮本の部首内にはないにしても、他の部首の中に含まれている可能性は大きいにある。

以上のことから、図書寮本の編者が見出し字を選ぶ際、論語本文の登場字すべてを視野に入れていたと言うことができる。しかし、両方が重なっているものに、すべて和訓が引用されている

るわけではない。図書寮本において、見出し字となっている論語の本文の字の中、論語からの和訓の引用がない 24 字は、どう解釈すべきであろうか。各字を、論語の訓点本で調べた結果、和訓が引用されていない場合の要因<sup>(23)</sup>としては、訓点資料に訓が付いていない、訓が付いていても字音であるか、論語では人名など固有名詞に主に用いられる字である、他の訓点本と同訓である、などが考えられる。また、出典記入を忘れたと思われるものもある。

次は、観智院本における論語本文の字と見出し字との関係を調べてみる。

観智院本の中、図書寮本と重なる部首の見出し字を数えると、以下のとおりである。

水部 139 ㄱ部 67 言部 712 足部 513 立部 94 豆部 58 ト部 31 山部 328 石部 365  
 玉部 416 邑部 336 阜部 284 土部 615 心部 973 巾部 248 糸部 744 衣部 439 〈合計〉 7762

論語本文の字、325 の中、306 字が観智院本の該当部首内に見出し字としてあらわれる。その部首内になく 19 字の中、17 字は他の部首に所属しており、観智院本において、見出し字としてあらわれない論語本文の字は、「糾」と「綰」の 2 字だけである。このように、観智院本においても、論語の本文に登場する字は、ほぼすべてが見出し字として採用されているのである。なお、図書寮本には見出しとしてあらわれるのに、観智院本にはない字は、「糾」の 1 字のみである。

### 3 高山寺本論語集解卷第八の訓と圖書寮本類聚名義抄の和訓引用

現存鎌倉時代の論語の訓点本の中、最古のものである高山寺本巻八を清家本を用い、圖書寮本の和訓引用の実態を調べる。今回は、本文の字だけでなく、注文の字までを対象とする。

圖書寮本の現存部首に所属する巻八の字は、92字であり、この中、圖書寮本の見出し字になっているのは、90字であって、心部の「必」と「慮」の2字だけが見出し字となっていない。しかし、この2字を観智院本で引くと、「必」は八部と雑部との二部にわたって所属しており、「慮」は庀部に属している。従って、圖書寮本においても、現存しない他の部首に所属していた可能性が高く、論語の巻八の出見字はすべて圖書寮本の見出し字となっていたと言える。

見出し字になっている90字の中、訓点本において和訓が付いているのは、53字である。この中、論語から和訓が引用されているのは、5字に過ぎず、48字については論語からの和訓引用は見えない。訓点本に和訓が付いているのに、その和訓が論語から引用されていない48字、合計49例<sup>25</sup>、の和訓引用の状況を調べてみると、以下のとおりである。

#### I 和訓引用がある：42例

##### 1 他の出典と同訓である：34例

① 同位以上の出典と同訓である：31例（蹈・愆（以上大般若

経字抄）想（善珠）阿（季綱切韻）試・諒・隱・均（以上周易）治・終①（以上尚書）賢・念・恕・恣・絶（以上毛詩）汝・語・識・謂・言・誰・讓・譽・立・志・患・忿（以上史記）滅・思・怨・意（以上文選）

② 下位以下の出典と同訓である：3例（議〔律〕・懷〔禮記〕・隨〔小切韻〕）

2 同訓はあるが、出典不記入：2例（終②・忌）

3 同訓なし：6例（濫・没・深・湯・陳・恐）

II 和訓引用なし：7例（次・誠・巔・邦・忍・憂・急）

この中、同位以上の出典と同訓であるものに関しては、論語の和訓より、その出典を優先したと解釈することができる。同訓はあるものの、その出典が書かれていないもの場合は、出典記入を忘れたものと考えることができる。問題になるのは、下位出典名が書かれていない3例と、和訓引用はあるものの、論語巻八の和訓が引かれていない6例、そして、和訓引用のない7例である。この16字の高山寺本巻八での訓は、「議マコトアルヲ・ハカル、隨シタカフテ、懷フト（コロニス、濫<sup>左</sup>ヌスミヲス、没ヲフレトモ、深フカク、湯ユ、陳ハカテ、恐ヲソラクハ、次ツキ、誠マコト、巔クツカヘレトモ、邦クニ、忍シノヒ、憂ウレフ、急スミヤカニ」のようである。

下位出典名が書かれたものについては、圖書寮本が参照した論語の訓点本に訓がついていなかった可能性がまず考えられる。「隨」の場合、衛靈公第十五の二十九章の注文に見えるが、高山寺本以外の写本には、訓が付いていない。その他には、微子第十八の十一章に

一回見えるが、人名に用いられている。「懷」に関しては、多くの和訓が引用され、その出典の記録に混乱が見えることについては前述のとおりである。「議」は、図書寮本での記事が欄外や行間にまで及んでおり、整理されていない様子である。従って、和訓の引用も正確に行われていなかった可能性がある。

残る13例の中、「濫」については、正和本、成實堂本、永正本<sup>26</sup>ともに「ラム」とあることから、図書寮本が参照した写本にも字音訓のみであったのではないかと思われる。その他の12例は、その字と訓の結びつきが強いものであり、それが引用を避けた一つの原因になっているのではないかと思われる。また、周知のとおり、図書寮本の見出しすべてに和訓が引かれているわけではない。たとえば、言部を見ると、210の見出し字の中、111字<sup>27</sup>、つまり約50%に和訓が引用されている。さらに、水部は、399字の中、153字、約38%に和訓の引用が見えるだけである。和訓を採録する際の基準については、他の出典からの和訓の考察を含め、より総合的な考察が必要であろう。

#### 四 まとめ

考察結果をまとめると、以下のとおりである。

一 図書寮本類聚名義抄には、見出し字に論語の和訓が引用されているものが48字ある。引用された和訓は、論語の本文だけではなく、注文からのものも6字（踞・玷・詐・愚・帥・被）ある。また、論語ではその字が確認されないものも2字（崖・累）あ

り、字はあらわれても訓が一致しないものも2字（班・給）ある。その他は、「疏」の訓を記入してある「夥」、そして、論語で確認できる訓と確認できない訓とをともにもつ「懷」の2字である。

二 用例を和訓引用の状況から見ると、論語からの和訓だけを引いている例が23字で、全体の約半分を占める。また、用例の見出し字が熟字である33字の中、「温故・<sup>訓</sup>於言・不踐迹・詐愚・<sup>訓</sup>恥辱・恥辱」の7字の場合は、図書寮本の見出しの形で論語に見える。これは論語から採用された見出しであることに間違いはない。

三 48字を考察した結果からは、図書寮本に反映されている平安時代の論語の訓読と鎌倉時代のそれとは大きな異同はない。また、經典釈文の論語音義との特別な関わりは確認できない。

四 論語の本文に登場する字と、図書寮本の見出し字とを比較してみると、論語本文の出現字は、ほぼすべてが図書寮本の見出し字としてあらわれている。これは、観智院本においても同様である。

五 高山寺本論語集解巻八（清家本）を対象として、図書寮本の論語の和訓引用について調べた結果、付訓があるのに論語から和訓が引用されていない（合計49例）要因としては、31例は同位以上の出典と同訓であるため、2例は出典記入を忘れたためであると思われる。その他の16例については、図書寮本が参照したテキストに訓が付いていなかった可能性、付いていても字音であった可能性、常用訓の引用を避けた可能性などが考えられ

る。

## 《注》

- (1) 「磨」、「懷」は、見出しとして二回ずつあらわれる。
- (2) 以下、本稿での注、あるいは注文とは、論語集解の注をいう。
- (3) ここに用いた訓点本以外に、群書治要本(正嘉元年(一二五七)清原教隆点)と建武本(大東急記念文庫蔵論語集解十卷、卷一〜六建武四年(一一三三七)清原頼元点・卷七〜十康永元年(一一三四二)清原良兼点)がある。群書治要本の場合、用例の中、論語本文あるいは、注に見える44字の中、31字の所在場所が載っていない。また、建武本は、小林芳規(一九六八)博士のご指摘のとおり、訓の加點時期における二重性が認められるので、本稿の考察からは除外した。しかし、建武本の場合、必要に応じて引用したところがある。
- (4) 成實堂本論語抄(文明七年(一四七五)以前成立・室町書写本、影印本使用)は、他の写本より時代が下るが、本文に丁寧な訓が付しており、今回の調査範囲内では、その訓の内容は鎌倉時代の写本とほぼ同じである。
- (5) 吉川幸次郎(一九九六、初版一九六〇)『論語(上・下)』朝日新聞社
- (6) 図書寮本類聚名義抄の出典索引では、省略部分を「纂」の字としている。この項目の前項が「纂吃」であるためであらう。しかし、「訥」が正しい。
- (7) 図書寮本の出典索引によると、「經」の字に対して、「クヒル」以外に、「ツクル」も論語からの引用であるとする。しかし、該当箇所は、「ツクル、論」とあり、これは、論語ではなく別の出典からのものであると思われる。
- (8) 『經典釈文(新校經典釈文)』學海出版社、一九六六
- (9) 中田祝夫編『東山御文庫蔵称光天皇宸翰應永二十七年本論語抄(抄物大系)』勉誠社、一九七六
- (10) 東洋文庫蔵論語集解 室町初期刊 三條西実隆加點 正平版單跋本(マイクロフィルムの焼き付け本)
- (11) 東洋文庫蔵論語集解 室町後期写(清原枝賢自筆か) 永正九年清原宣賢奥書全十帖(マイクロフィルムの焼き付け本)
- (12) 出典名が「論語注」と書かれているのは、この1例のみである。
- (13) 『毛詩鄭箋(古典研究会叢書)』卷第三、汲古書院、一九九四、卷十六287行
- (14) 『毛詩抄 詩經』卷第四、岩波書店、一九九六、各60・61頁
- (15) 川瀬一馬(一九七四)によると、朱子新注の伝来は、13世紀前半とされる。従って、その成立が一〇〇年頃とされる図書寮本には朱子新注の影響は見られないはずである。
- (16) 図書寮本の出典研究に関しては参考文献参照。宮澤俊雅(一九九二)によると、図書寮本の注文の配列は、ほぼ字体注、正音注、義注、真仮名和訓、吳音注、点本和訓、片仮名和訓、和音注の順であるという。また、訓点本による片仮名和訓引用の序列は、周易―尚書―毛詩―史記―論語―文選―月令―後漢書―律・列伝・禮記・集―白・遊仙窟・唱和集―小切韻の順であ

るという。

(15) 「無」とは、出典記入のない場合をいう。

(16) 2カ所ともに、同じ出典である。

(17) 「詐愚」、「恥辱」に関しては、単一見出しであるが、本稿では漢字一字を考察の単位としているので、分離してあげた。

(18) 「原形」とは、動詞・形容詞・形容動詞の場合は終止形を、名詞の場合は助詞を省いた形を指す。

(19) たとえば、前掲の「淪没」〔正〕ツクシ↓ツクス、「経緯」〔正〕クヒレ↓クヒルのような例である。

(20) 64頁

(21) この調査においては、論語全体ではなく、本文の字に限った。

(22) 「辱」、「比」は、所属部首がないため、この数字の中には含まれていない。

(23) この点は、観智院本の考察から十分に証明できる。

(24) これについては、次節でさらに詳述する。

(25) 卷八の中に、「終」の訓は、ツヒニ・ヲフの二つがある。前者を「終①」、後者を「終②」とした。従って、合計は、48字49例になる。

(26) 文永本は該当箇所なし。嘉暦本は訓なし。

(27) 二字熟語に引かれた和訓もいくつか存するが、ここでは便宜上、見出し字を基準として換算した結果をあげる。水部も同。

## 《参考文献》

池田証寿(191) 「図書寮本類聚名義抄と玄応音義との関係について」

『国語国文研究』88

(1993) 「図書寮本類聚名義抄と篆隸万象名義との関係について」『人文科学論集(信州大学人文学部)』26

(1995) 「図書寮本類聚名義抄と類音決」『訓点語と訓点資料』96

今西浩子(1976) 「類聚名義抄・和訓の配列」『訓点語と訓点資料』57

川瀬一馬(1974) 「日本で論語がどのように読まれたか」『論語(大東急記念文庫文化講座講演録)』大東急記念文庫

小林芳規(1968) 「論語訓読史から見た論語集解建武本の訓点」『かがみ』2

小松英雄(1971) 『日本声調史論考』風間書房

佐藤喜代治(1995) 『色葉字類抄』略注、明治書院

築島 裕(1950) 「類聚名義抄の倭訓の源流について」『国語と国文学』27・7

(1950) 「訓読史上の図書寮本類聚名義抄」『国語学』37

(1970) 「和訓の伝流」『国語学』82

(1988) 「漢文訓読と古辞書の古訓点」『中央大学国文』31

(1980) 「類聚名義抄の疑問訓」『訓点語と訓点資料』62

(1980) 「観智院本類聚名義抄補訂試案」『訓点語と訓点資料』64

西端幸雄(1971)「類聚名義抄における誤写の考察」『訓点語と訓点資料』45

(1973)「類聚名義抄における誤写の諸例」『訓点語と訓点資料』52

山本秀人(1988)「類聚名義抄における和名類聚抄を出典とする和訓の撰取方について」『広島大学文学部紀要』47

(1992)「図書寮本類聚名義抄における標出語の採録方について——注文の出典との関連を視点に——」『小林芳規博士退官記念国語学論集』汲古書院

宮澤俊雅(1986)「図書寮本類聚名義抄と倭名類聚抄」『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院

(1987)「図書寮本類聚名義抄と篆隸万象名義」『訓点語と訓点資料』77

(1992)「図書寮本類聚名義抄の注文の配列について」『小林芳規博士退官記念国語学論集』汲古書院

望月郁子(1985)「図書寮本『類聚名義抄』における『篆隸万象名義』の扱い方——改編本におけるそれとの対比のために——」『訓点語と訓点資料』75

(1992)「類聚名義抄の文献学的研究」笠間書院

吉田金彦(1951)「類聚名義抄にみえる和音注について」『国語学』6

(1955)「国語学における古辞書研究の立場」『国語学』23

(1955)「類聚名義抄小論」『国語国文』24・3

(1956)「類聚名義抄の展開」『訓点語と訓点資料』6

〈附記〉本稿は、平成十一年度春期国語学会での研究発表の原稿を修正・加筆したものである。席上ご教示賜った小林芳規先生、大槻信氏に厚くお礼申し上げる。また、小助川貞次先生には、発表の前、後、貴重なご指摘をいただいた。記して心からお礼申し上げます。

(お みよん・北大大学院博士課程)